

## 概略表現「ほとんど」における「全体」について

疏 蒲劍

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

shupujian@163.com

### 1. これまでの研究とその課題

森田(1977)は「ほとんど」について「量を前提とした事物の全体に対し、その大部分を占める割合を取り立てる発想である」と指摘している。飛田・浅田(1994)にも似たような説明がある。

(1) \*私の学校には学生がほとんど 1500 人います。(佐治 1992 による)

(2) ?身長もほとんど 1 米をこえるかこえないぐらいでしょう。(佐治 1992 による)

佐治(1992)は(1)について、「1500 人います」が「全体であるという意味を持たない」ため、これを非文としているが、(2)の場合、許容度が大きく上がるとしている。これは興味深い現象であり、さらに議論する余地がある。本稿では、先行研究に提示された諸問題を踏まえて、「ほとんど」が用いられる文における「全体」のあり方について考察したい。

### 2. いわゆる「全体」について

本稿では、「ほとんど」における「全体」については「量的全体」、「属性的全体」、「蓋然性的全体」といった下位分類を設定したうえで考えたい。

#### 2.1 量的全体

「量的全体」については、「ほとんど」の用法(名詞的か副詞的か)に分けて見てみたい。

(3) 乗客のほとんどが「青春 18 きっぷ」利用者だ。(中尾一樹「青春 18 きっぷ完全攻略ガイド」)

(4) 現代ではほとんどの人は病院で死ぬ。(木原武一「人生最後の時間」)

(5) 個展は東京の方面がほとんどですよ。(林光「職人技を見て歩く」)

「ほとんど」は(3)(4)(5)では、名詞的に使われている。この場合、「Nのほとんど～」、「ほとんどのN～」、「N1はN2がほとんどだ」(Nは名詞句)といった構文<sup>1</sup>が用いられる。これらの構文における「量的全体」には、表1のような特徴がある。

表1 名詞的用法における量的全体

構文	量的全体の意味特徴
Nのほとんど～	分割可能なもの
ほとんどのN～	複数存在するもの
N1はN2がほとんどだ	N1は分割可能なもの

表1の「分割可能なもの」と「複数存在するもの」は対立する概念ではない。たとえば、次の(6)(7)(8)では、「参加者」は分割可能なものにも複数存在するものにも考えられるが、(9)の「人類の歴史」は分割可能なもののみである。

- (6) {参加者/\*夏目漱石}のほとんどが日本人です。
- (7) ほとんどの{参加者/\*夏目漱石}は日本人です。
- (8) {参加者/\*夏目漱石}は仕事熱心な人がほとんどです。
- (9) 人類の歴史のほとんどは飢えとの闘いであった。(工藤陽孝「走れキヨタカ」)

「参加者」が一人しかいない場合、(6)(7)(8)はいずれも非文となる。また、分割可能なものにせよ、複数存在するものにせよ、森山(2001)で言う「少量数カウントの制約」がかかっている。つまり、分割可能な数と複数存在する数は、一定以上の「多量数」でなければならない。たとえば、「参加者」の人数が10人以下の場合、これらの文には多少違和感がある。

- (10) 化学療法の副作用で、このころには、もう髪の毛はほとんど抜けていました。(先間敏子「たくさんの愛をありがとう」)
- (11) 発声と同時に肩を下げるので、そのとき空気をほとんど出してしまう結果となる。(加藤透「喉が疲れない日本語を話す発声練習」)
- (12) ズェルトから北海沿岸のノルデンまでは約七時間かかるため、この日は鉄道を乗り継いでほとんど一日電車に乗っていた。(沖島博美「北ドイツ=海の街の物語」)
- (13) グリンデルワルトからはほとんど三百六十度、アルプスの高峰が望まれる。(岳真也「魅惑の車窓地を這う旅へ」)
- (14) 私はお酒を飲むと真っ赤になるので、ほとんど飲みません。(太田和義「当世酔っ払い事情」)

上の(10)(11)(12)(13)(14)では「ほとんど」が副詞的に使われている。それぞれの「量的全体」は、「動作の主体」、「動作の対象」、「動作の時間」、「動作の空間」、「頻度」に当たる。ただし、「夕べの懇親会では、私はほとんど飲まなかった」は(14)に似ているが、ここの「全体」は「動作対象」として理解される。

表2 副詞的用法における量的全体

構文機能	量的全体の意味特徴
動作の主体・対象・時間・空間	分割可能なもの
頻度	複数回生起可能な動作

副詞的用法の場合でも、少量数カウントの制約がかかると思われる。

森山(2001)は「ほとんど8人です」という例文について、「頻度読み」であれば、「いつもに対するほとんど」という解釈で「事態の発生」割合を表すので、少量数カウントでも成立し、内容

的な数値とは無関係であるとしている。しかし、入社して一週間も経たない新人について、「あの人はほとんど残業しない」という「頻度読み」はいささか不自然ではないだろうか。

## 2.2 属性的全体

本稿では、「属性的全体」の場合、「ほとんど」はある「一点的」な状態に近いことを表すと定義したい。佐野(1999)では「ほとんど」と共起可能な状態性述語について次の(15)(16)(17)(いずれも佐野 1999 による)を挙げている。

(15) {非常に/ほとんど}満足だ。

(16) まわりは体温とほとんど同じ暑さだ。

(17) (8月の非常に雨の多い日に)ほとんど6月だ。

飛田・浅田(1994)は「ほとんど」は打消しや否定の表現を伴い、完全に存在しないのに近い状態を表すとしているが、(15)(16)(17)については触れていない<sup>2</sup>。本稿では、打ち消しや否定の表現も一点的な状態の1種類と考えたい。

(18) ボードウェアに求められる防水性と透湿性は、ほとんど完璧に近い。(井上健二「Tarzan」)

上の(18)のような「ほとんど〜に近い」という構文がよく見られる。この構文に現れる語は「不可能」、「完璧」、「悲鳴」、「ゼロ」などといったような一点的な状態を示唆するものに限られている。事実、「ここはほとんど東京に近い」という文は、普通「ここは東京のようににぎやかだ」と理解されるのである。

属性は、量に対する人間の認知による判断の結果であり、既にある程度主観性が帯びていると言えよう。たとえば、「AはBにほとんど等しい」の場合、厳密に言えば、 $A=B$ の関係は成り立たず、「等しい」という属性へかなり接近していることを示唆するに過ぎない。ただし、この属性的全体は、一点的な状態でなければならない。たとえば、「太郎はほとんど優しい」は「頻度」というようにしか、理解できない。

(19) 六区は人影が少く、浅草寺詣でのお上りさんの団体だけが目立った。古い物が前面に出てきて、殆ど田舎町のようなであった。(小林信彦「私説東京繁昌記」)

上の(19)は、森山(2001)が指摘するように、属性を「大袈裟」に極端化している。この属性的全体はさらに話し手の主観へ傾いていると言えよう。

## 2.3 蓋然性的全体

「ほとんど」には次のような用法がある。

(20) その声の激しい調子につられて、私は一瞬ほとんど真実を告げそうになり、辛くも思い止まって懇願した。(江藤淳「妻と私」)

森田(1977)はこれについて、「その事態の成立する可能性が高かったにもかかわらず、成立しなかった場合に用いる」としている。本稿では、杉村(2000)が指摘する「事態の蓋然性」(=客

体世界における事態成立の可能性の度合い)に従い、「蓋然性的全体」と名づけたい。

ここの蓋然性はかなり高いようである。たとえば、次の(21)のような否定の表現においても、事態が成立しない可能性が高いという意味では、(20)と一致している。

(21) 年老いて死に瀕しても、故郷に帰って死にたいとの念は、今から想像した所では、殆んど起りそうにもない。私が愛着する土地は、自分が生活してる現在の土地である。

飛田・浅田(1994)も指摘するように、「ほとんど」は「いまにも」や「すんでのところ」でと違い、事態の蓋然性に関する期待も憂慮もない。

### 3. まとめと今後の課題

本稿は「ほとんど」が用いられる文における「全体」の意味特徴について考察した。冒頭の(1)にある「\*ほとんど 1500 人」には「全体」が考えられないが、「ほとんど 1500 人を超えた」、「ほとんど 1500 人に等しい」、「ほとんど 1500 人を超えそうになる」では自然さが高くなる。これは、「量的全体」、「属性的全体」、「蓋然性的全体」の付与による許容度の上昇と言えよう。

今後、「ほとんど」に似たような概略表現の「ほぼ」、「だいたい」、「おおよそ」などを対照しながら、概略表現の意味と用法をより詳しく記述したい。

### 注

- 1) 「チョムスキーのほとんどの論文」というような「N1 のほとんどの N2」構文も見られるが、これは [N1 の [ほとんどの [N2]]] という構造で、規定語付きの「ほとんどの N」と考えても良さそうである。
- 2) 飛田・浅田(1994)は「純子の答えはぼくのほとんど同じだった」という文について、「ほとんど」は「全体(完全)に近い大部分を表す」としが、「答え」を分割可能な量的全体と考えている。

### 参考文献

- 佐治圭三(1992)『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』pp. 57-73 ひつじ書房
- 佐野由紀子(1999)「程度副詞との共起関係による状態性述語の分類」『現代日本語研究』(6) pp. 32-50
- 杉村 泰(2000)『現代日本語における蓋然性を表す副詞の研究』名古屋大学大学院文学研究科博士論文
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』pp. 475-477 東京堂出版
- 森田良行(1977)『基礎日本語——意味と使い方』pp. 416-418 角川書店
- 森山卓郎(2001)「近似値表示の連体詞と副詞—概数規定類と概略副詞類—」『国語学研究』(40)pp. 141-104